

「水は水色だった! (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

水彩画を描いていると、青や水色をよく使う。私の場合、青は「ウルトラマリン」や「コバルトブルー」、水色は「ホリゾンブルー」や「パチダーブルー」という色を好んで使う。



特に、湖や海を描く場合、青や水色がないと絵にならない。「水面=青」という方程式があるからだろう。これは子どもの頃からずっと植え付けられている、いわば「色の図式化」と言える。



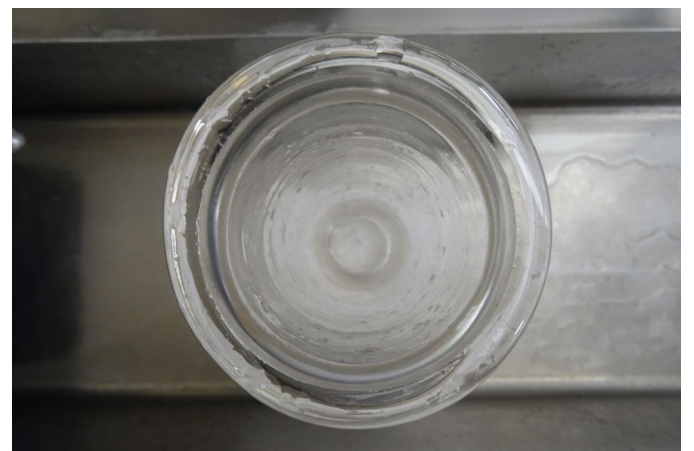
実際に湖の水は青い。特によく晴れて青空が広がっている日は真っ青に見える。写真は第三展望台から見た摩周湖だ。「摩周ブルー」という固有の色名があるほど、深く澄んだ青色をしている。もちろん水に青色がついているわけではない。集水面積が狭い摩周湖は世界屈指の透明度を持つ。世界の大気の状態は、摩周湖の水の分析でわかるほどだ。つまり摩周湖の水は「最も純粋で透明な水」なのだ。

確かに水は「透明」だ。しかし「無色透明」ではない。「有色透明」なのだ。空や周囲の色を反射して青いのではなく、水という物質そのものがわずかに「青い」のだという。私は、まず自分自身でそれを実感してみたいと思った。

小さなコップに水を入れて、それを覗き込んでも、水は無色透明にしか見えない。「水は青い」といっても、それはものすごく「薄い青」で、限りなく「無色」に近いはずだ。従って、水道の蛇口から出てくる水を見て「青い」と感じることはない。



「水の青さ」を実感するには、相当な「水の深さ」が必要だ。それも、もともと色のついた容器はNGである。プールは深さが1mくらいあるので良さそうだが底や側面が塗装されていることが多い。私は理科室にあった腰の高いガラス容器を使ってみることにした。もともと何かの液浸標本が入っていたものだ。深さは60cmあり、透明なガラス製品だ。これを流しに置いて、底に白い紙を置いた。



最初は水を入れずに観察し、写真をとってみた。気体はハロゲン(臭素・塩素・ヨウ素等の気体)を除き、は無色透明なので、これが「ガラス容器の色」ということになる。当然青くない。